# R. H. ブライズ顕彰の書――『ブライズ先生、ありがとう』書評
## Review of UEDA Kuniyoshi: *Thank you, Professor Blyth*

村松　眞一
MURAMATSU Shin-ichi

この本は、私にとってブライズ先生の人物や書き物を極めて身近に感じさせてくれるもので、こうした本を書ける人は、先生の教え子上田邦義氏を措いて他にいないと思われる。

私が初めてブライズという名前に出会ったのは、京都で学生時代、百万遍近くの書店で、ふと『禅と英文学』という本を手にしたときのことで、売れ残っていたのか、ちょっとカバーがよごれていたが、思い切って買いこみ、以来忘れられない著者なのである。

上田氏の本を読み、あらためて思えば、明治のラフカディオ・ハーンと並んで、ブライズ先生は第二次世界大戦以後、日本の大学で教鞭をとった、日本人が最も感謝すべき外国人教師の一人であると言わざるをえない（数年前、ジョージ・ヒューズ氏が『ハーンの轍の中で』（研究社）という本の中で、ちょっとブライズにも言及しているのであるが。）

この本は第一章「真の教育者ブライズ先生」、第二章「ブライズ先生を追いかけて」、第三章「ブライズ先生の愛した日本」、第四章「ブライズ先生最後の授業」の四つの章から成る。全体として非常に親しみ深い文体で、よくポイントを押さえて書かれている。

第一章では、いかにもブライズ先生らしい教育者としての真面目（しんめんぼく）が語られる。今の天皇陛下は東宮時代に、家庭教師ブライズ先生から、単に英語を教わっただけでなく、人間としての生き方を教えられたのであった。授業中に、先生がたまたま鉛筆を落としてしまったとき、誰が拾うべきかと皇太子に問いかけた。この場合身分の高い人が拾うべきこと、noblesse oblige ということを、それも他からの強制や命令でなく、自然な自発性に基づく行為として、自身の判断で行うべきことを教えられたという。これこそ、まさに人間教育そのものではないか。常日頃、現陛下のお心遣いに、いまもこの教訓が生かされているという。私はこれを読み、平成17年夏、両陛下が太平洋戦争の犠牲者を追悼されサイパン島の戦跡を訪ねられたとき、「スイサイド・クリフ」に向かい黙祷されたことがあったのを思い出す。その他、戦後の天皇陛下の神格を否定した、いわゆる「人間宣言」にも、その英文草案作成にブライズの無視できない影の力があったことを知らされる。

この章ではまた、ブライズが、第一次世界大戦のときから「良心的兵役忌避者」であったこと、徹底した菜食主義者で、自らをユーモラスに「革靴を履くヴェジテリアン」と称していたこと、日本の支配下にあった京城で英語を教える傍ら、妙心寺別院の華山大義老師に参禅したことが、その後の人生を決定づけたことなどが述べられる。禅への傾倒はブライズの人生の中核をなすものとなるが、彼の反戦思想は政府批判を避けてか、戦時中出

版された『禅と英文学』の末尾に近く、当時の禅への批判ともとれる一文が見受けられるのは注目されよう――「禅は全世界の自殺行為に加担することになりはしないか」と。

第二章では、学部・大学院と九年間ブライズ先生の講義や演習の授業を通して先生からまたとない貴重な教えを受けた著者の、生(なま)の体験を語っている。そして随所にブライズの面目躍如たるものを感じる。例えば、ワーズワスの詩の多くは純粋に自然を歌ったものではないが、芭蕉は大自然そのもの、世界最高の詩人と評価していたこと。また講義中「ハムレットはおろかな若者だ」と一喝され、生の意味に思い悩んでいた著者は生きる目標を与えられたこと。中途半端が嫌いで「竹を割ったように生きる」こともブライズ先生の教訓。私はこれを読み、ブライズはずばりと決断的な言い方をされることがあるので、ときに誤解を招くおそれがあることを思い出した。

ブライズ先生の英詩講義もまた貴重な体験であったろう。一番大事な授業は詩の授業であるとするのも同感。特にその音読重視の授業は羨ましいほどである。「詩の朗読を聞けば天国へ行けるかどうかもわかる」と言われたそうで、著者は「命がけの」その朗読を先生からほめられ、それが励みとなり支えとなって、やがてシェイクスピアの英語に謡曲の節付けをする「能シェイクスピア」の企てへと発展するのである。英詩講義の実例としては、スティーヴンソンの“Rain”の音読が紹介されている。

第三章では、HAIKU 全４巻の著者、俳句を世界に広めた第一人者としてのブライズ、それに伴いブライズの芭蕉論やブライズ流の俳句の技法、禅観などが述べられる。1910年代に英米の詩人がイマジズム運動のなかで俳句に注目したことはあったが、Haiku を国際的なものにした功績はブライズのものであろう。私は一茶の句のドイツ語訳を読んだことがある。ブライズの、四大俳人（芭蕉、蕪村、一茶、子規）の比較も興味ふかい。ブライズによれば、芭蕉は生活の詩人であり、「真の日本的天才」である。また一茶にはシェイクスピア的性格があり、いかなる出来事もあるがままに受入れる「運命の詩人」であった。また、ユーモアは俳句に不可欠であり、俳句こそ人間を救う道であるとするのも、ブライズの俳句観の特徴として、なるほどと感心する。

第四章では、ブライズ先生の最終講義、ついで先生らしい死に方にふれている。その最終講義の受講生は著者ただ一人。テーマは「シェイクスピア劇に見られる愛」で、ブルータスとポーシャの愛にはユーモアが欠けていることを指摘された。『ハムレット』や『オセロ』の主人公の場合にも同様。これ以後ついに先生にお会いする機会がなかった著者は、1964年秋、新宿の清和病院で先生が亡くなられたのは、「一切の医学的治療を拒否されて自然死を選ばれたのではないか」と推測。それがいかにも先生らしい死に方であったという。ブライズ先生の辞世ともいうべき言葉は、「絶望的なときこそ人生には意味がある」。先生のお墓は、東慶寺の墓地の一角、「鈴木大拙夫妻乃墓」のすぐ後ろにある。

読後に、著者上田氏へのお願い。氏はブライズ先生と同様、自分の意志を貫かれる強い一面をお持ちである。そこでぜひ、『禅と英文学』の邦訳を完成させて欲しい。